

キリスト教特殊講義***

オリエンテーション

序論 宗教と社会・政治・民族

I 「政治的なもの」とキリスト教

II キリスト教思想と経済

1 聖書の宗教と経済

2 キリスト教と資本主義

3 経済の神学と公共性

4 経済と環境、あるいは政治の復権

7/7

Exkurs キリスト教から見た東アジアの多様性—家族・死者儀礼—

III 東アジアの近代化とキリスト教思想

10/6 ~

<前回>

1 聖書の宗教と経済

(1) 宗教と経済、問いの所在

(2) 聖書の宗教と経済

(3) 聖書が描く日常性の多様性

2 キリスト教と資本主義

(1) 近代と社会化の問題

・アーレントの近代論

古代ポリス→公共性・政治と私的領域（生命維持の労働、家族、経済）

言論と行為 (common/open)

公的領域の特性を明確化するためのモデルでは？

経済は本質的にグローバル化の傾向を有する

欲望と外的環境への適応

・近代=社会化

アーレントにおける否定的な見方。全体主義の起源という問題意識のため。

近代の特徴としての「社会的なもの」の登場・拡張

・キルケゴール以来の「近代大衆社会批判」というステレオタイプ

(2) 近代社会における「経済」の位置

・パーソンズとルーマン

機能システム分化と近代社会の成立

社会変動（出来事としての状況変化）から

意味論的変動（新しい観察図式の形成）へ

制度的再帰性

・パーソンズ：社会は諸要素からなる一定の均衡と自律性をもつシステムである。

↓

中期パーソンズ（『社会体系論』1951年など）

行為理論：社会体系の理論／パーソナリティ体系の理論／文化体系の理論

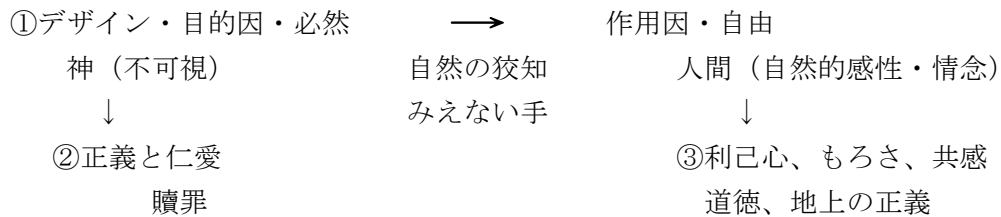
構造—機能分析、四機能分析（AGIL分析）

- ・ルーマンの機能—構造分析、自己組織化のシステム論（→ティリッヒ、アガンベン）

（3）資本主義と宗教—アダム・スミスの場合—

田中正司『アダム・スミスの自然神学——啓蒙の社会科学の形成母体』御茶の水書房。

- ・経済の深みとしての宗教、人間理解が両者の接点
- ・ウェーバー・テーゼ：キリスト教と近代資本主義の逆説的關係
- ・アダム・スミスの場合
- ・田中正司『アダム・スミスの自然神学——啓蒙の社会科学の形成母体』御茶の水書房。



- ・思想的背景（文脈）／「スミスの神観念」／地上の正義、共感／自然的感情・内なる人内なる人・良心、贖罪／コミュニケーション的倫理とその超越的根拠／自然本性とみえない手／欠陥・弱さを含む神のデザイン

- ・『国富論』とみえない手・市場原理

「『国富論』で、各人の自由な利己心追求活動がその意図しない帰結として社会全体の富の極大化とその適正配分につながる経済世界の自然法則を明らかにする一方、そうした自由（作用）⇨必然（目的）の自然法則の貫徹・実現を妨げる重商主義政策や、それと結びついた特権や独占を批判した根拠はそこにある」（266）

「偶然・自由の感覚に基づく自由な作用因としての活動が、人為的な政策介入や独占や特権がない限り、おのずから目的＝自然の必然法則（神のデザイン）を表現する」（267）

「経済社会における作用⇨目的のデザインを論証する経済理論体系の成熟と、それに対応する現実認識の進展に伴って、『感情論』の論理の根幹をなしていた作用（作用）⇨目的（必然）の論理の根幹をなす目的因仮説をひっこめ、作用因としての人間の構成する経済過程それぞれ自体としての経験的分析・叙述に専念することになったのである。みえない手が、『国富論』では神秘性を感じさせず、文字通り比喩的表現に転化している理由はそこにある」（267）

「みえない手の摂理の現実化機構としての市場の意義」、「その実現を妨げる人為的政策や独占・特権等の歴史的現状批判」（268）

3 経済の神学と公共性

<背景>

1980年代以降の世界経済の状況

グローバル化・「帝国」（ネグリ・ハート）

冷戦後、福祉国家から新自由主義へ、そしてバブル崩壊、リーマン・ショック



経済倫理の模索

<関連文献>

佐藤敏夫『レジャーの神学』新教出版社。

東方敬信『神の国と経済倫理——キリスト教の生活世界をめざして』教文館。

山本栄一『問いかける聖書と経済』関西学院大学出版会。

M・L・スタックハウス『公共神学と経済』聖学院大学出版会。

Max L. Stackhouse, *Public Theology and Political Economy. Christian Stewardship in Modern Society*, University Press of America, 1991.

, *Covenant & Commitment. Faith, Family, and Economic Life*,

Westminster John Knox Press, 1997.

E・F・シューマッハー『スモールイズビューティフル——人間中心の経済学』

講談社学術文庫。

佐和隆光『虚構と現実——社会科学の「有効性」とは何か』新曜社。

『成熟化社会の経済倫理』岩波書店。

『市場経済の終焉——日本経済をどうするのか』岩波新書。

Amartya Sen, *Inequality Reexamined*, Harvard University Press, 1992.

John Rawls, *A Theory of Justice*, Harvard University Press, 1971.

川本隆史『ロールズ』講談社。

Wolfhart Pannenberg, *Anthropologie in theologischer Perspektive*, Vandenhoeck & Ruprecht, 1983.

Eigentum, Arbeit, Wirtschaft, S.404-415

John B. Cobb Jr., *Postmodernism and Public Policy. Reframing Religion, Culture, Education, Sexuality, Class, Race, Politics, and the Economy*, State University of New York Press, 2002.

Chapter Five: Nature, Community, and the Human Economy, pp.101-123.

1. キリスト教思想の諸問題——経済・富・欲望——

(1) 消費主義と欲望のコントロール

1. 「消費主義」(consumerism)

消費の延長上に夢想される幸福、欲望の肥大化と幸福主義



消費社会の差違性(differentiation) = 他者への見せびらかし = 欲望

見せびらかしの消費(conspicuous consumption)

前衛による見せびらかしと文化の後衛にいる追従者たちの模倣による「流行」

ブランドの機能、消費財としての思想 → 止めどもない「新しさ」の追求

内実なしの新しさという「形式」

思想の実証科学化



2. 資本投資による「無限の拡張運動」、欲望の自己運動
 企業と消費者の共犯的運動
 リアリティの解体
 J. ボードリヤール『象徴交換と死』筑摩書房。
 (L'échange symbolique et la mort, 1975)
 Hannah Arendt, *The Human Condition*, The University of Chicago Press,
 1958.
 Chapter III. Labor、17. A consumers' society(pp.126-135)
3. 近代的なレジャーあるいは余暇 → 祝祭の喪失
 豊かな社会における日常の祭り化 (ケのハレ化)
4. バルトの「祝日」論 (Freiheit vor Gott, KD.III/4,51-79)
 Gott der Schöpfer will, daß der Mensch als sein Geschöpf sich vor ihm verantworte. Sein Gebot sagt im Besonderen, daß der Mensch seinen Tag als Tag der Feier, der Freiheit und der Freunde heilig halten, daß er sich mit Herz und Mund zu ihm bekennen, daß er als Bittender zu ihm kommen darf. (51)
 ・神からの限界づけ (労働の中断) という恵み：第一義的な事柄
 Es redet von einer Begrenzung des Handelns des Menschen. Unterbrechung (54)
 自己放棄(Entsagung)によって人間は新しい人間となる。
 「なすべし」と「なしうる」
 ・ヒューマニズム的意義(第二次的な事柄)：身体と精神と社会の健康・衛生(Hygiene)
 die humanitäre Grund
 しかし、神の戒めから分離されるとき、このヒューマニズム的祝日は、たんなる「仕事をしない日」となり、恵みに満ちた祝祭としての意義を失っています。
 教会に行くことも、第一次的な戒めから切り離された習慣となると、その意義を失ってしまう。
 ・祝祭としての祝日、他者と共に祝う (←→見せびらかしとしての消費)
 ↓
5. 豊かさの質を求めて、消費主義・幸福主義から自由であること。
 欲望のコントロールとしての自己放棄の戒め、欲望の鎮める技術としての行
 シューマッハーの言う「スモールイズビューティフル」

(2) 所有概念の問い直し

6. 所有：「固有な」「ふさわしい」
 所有の両義性：所有は自由（自立させる）を約束すると同時に、他者の尊厳を脅かす（支配する力）
7. 近代的な所有概念の成立（イギリスの近代哲学）とその意義
 田中正司『市民社会理論の原型——ジョン・ロック論考』御茶の水書房。
 中才敏郎編『ヒューム読本』法政大学出版局。
 伊勢俊彦「ヒューム、その道徳哲学の視野」
8. ロック『市民政府論』

神の創造→世界の共有と身体の私有→身体を使って働いた結果 (自然物に労働をませ
合わせる) はその人の所有物になる

7. 功績と報酬

- ・「腐敗制限」という功績による所有

創意工夫した功績によって増えた富は所有できる

- ・「経済的インセンティブ」「報酬」としての所有

自然のままに放置された土地より、労働の結果実りあるものとなった土地の方が、
人類全体の資産を増やしたことになる。土地の「囲い込み」による報酬としての所
有。

cf. アーレント：囲い込みが富の蓄積を生み出し、社会化を促進した。

HC. Chapter VI. The Vita Activa and the Modern Age.

35. World Alienation

8. 所有の根拠としての「権原」(title)：

身体とそれを用いた労働

新しく生み出されたものへの貢献度 (業績本位)

相続などによって受け継がれたものや社会的慣習で所有が認められるもの (帰属本
位)

9. ヒューム

先占(occupation)、時効(prescription、長期に所有されたものはその人のもの。先祖代々
住んでいる土地)、相続(succession)、添付(accession、資金が生み出し利子)

10. 聖書と所有

神の創造された世界のスチュワード (世話係り) としての人間

スタックハウス、山本

一切は「神の賜物」、個人も国家も相対的所有を有するのみ

土地は神の物であり、人間は土地に寄留しているに過ぎない。

「土地を売らねばならないときにも、土地を買い戻す権利を放棄してはならない。

土地はわたしのものであり、あなたたちはわたしの土地に寄留し、滞在する者に
すぎない。」(レビ 25.23)

↓

身体を含めた生命自体も神の物。自由に処分する権利は、たとえ本人であったとし
ても有しない。

cf. ガルストの土地単税論

11. 近代＝「所有ルール」の変更

特許と知的財産権

中世：知的情報は一端社会に公表されるとすべて共有となる

15 世紀頃：国王による特許(patent)が認められ、「知的財産権」が私有化された

↓

近代的所有権の確立＝聖書的な所有理念からの逸脱

12. Pannenberg(1983)

Unter allen gesellschaftlichen Institutionen ist die des Eigentums diejenige, bei der das Moment

der Partikularität im Gegensatz zur Gemeinschaftlichkeit am stärksten hervortritt. Das Eigentum hat sein Wesen im andere ausschließenden Verfügungsrecht über eine Sache. (404)

An diesem Punkt kommt die Zweideutigkeit der Eigentumsbildung und der ihr innewohnenden Ausdehnungstendenz in den Blick,

Jesu Kritik (z.B. Lk 12.15-21) (406)

13. 囲い込みによる私有の宣言

自分の所有を外部に対して囲い込み、閉じ込める。
柵を設けて、独占的な処分権を持つこと

↓

所有による自己の拡大、近代的自己、所有的個人主義

↓

競争と衝突の世界

この自然的生の状況を克服するものとしての文化的生（倫理）

14. しかし、倫理はそれ自体を有しており、それでは近代的所有のアポリアは克服できない。

波多野精一あるいはキルケゴール

15. 三位一体論的専制君主制、絶対的主体としての神 → 近代的所有の絶対化

神はこの世の唯一の絶対的支配者である。この神の似姿は王の中でもっとも輝く＝王の絶対的な所有権。この絶対的な所有の普遍化としての「個人の絶対的な私有権」

モルトマンによれば、前期バルトはこれを克服できずにいる。

Jürgen Moltman, *Trinität und Reich Gottes*, 1980.

↓

個人と国家の対立（私と公の二分法、これらを媒介する公共性の崩壊）

16. 独占的所有は人間をどれほど幸福にするか？

トルストイ

- ・わかち合いの共同性と私有の限定
- ・しかし、聖書的な所有を基礎づける人間論は構築しうるか？

2. 経済行為と人間論

(3) 経済人を超えて

17. アダム・スミスの経済人モデル

合理的に私益（欲望の極大化）を追求する人間

18. 経済行為の文化的意味

同じ財をいかなる仕方を使用するかを選択に、その人間の価値観が表れる。経済行為は人間の生きる意味から解釈できる。

↓

経済人モデルによる経済学的な経済行為の解釈は、人間学としては一面的

19. 別の経済理解は、より十全な人間理解を必要とする。

神の自己贈与に基づく人間相互の贈与に基礎を置く共同性

正義の倫理 (合理的で公正な分配) に対する配慮の倫理 (贈与)

20. 人間らしさを可能にする財の範囲とは

アマルティア・セン

センによるロールズ批判から。

財の平等 (形式的正義) だけでは不十分である。それを使用する人間の視点の必要性。

21. Rawls(1971, 60)

The first statement of the two principles reads as follows.

First: each person is to have an equal right to the most extensive basic liberty compatible with a similar liberty for others.

Second: social and economic inequalities are to be arranged so that they are both

(a) reasonably expected to be to everyone's advantage, and

(b) attached to positions and offices open to all.

(a) : 格差原理(The difference principle)

Social and economic inequalities are to be arranged so that they are both (a) to the greatest benefit of the least advantaged and (b) attached to offices and positions open to all under conditions of fair equality of opportunity. (83)

22. 基本財から潜在能力への配慮へ

ロールズの格差原理は、権利、自由と機会、所得と富、自尊心の社会的基盤などの「基本財」(primary goods)の分布に着目したものである。平等と正義の分析を「達成された成果」から「享受している自由」へと軌道修正する効果をもつ。

基本財：合理的な人間ならば、みな求めると想定されるもの。所得と富、基本的自由、移動と職業選択の自由、仕事と責任ある地位といった権力と特権、自尊心の社会的基盤など。基本財は、正義あるいは人間を論じるにおいて十分か。

基本財を多く持っていていても潜在能力が低いことが起こりうる。同じ潜在能力を持っていても、それぞれの目標にしたがって異なる機能の組み合わせを選択するケースがある。

23. Primary goods are general purpose means or resources useful for the pursuit of different ideas of the good that the individuals may have. (Sen,1992,81)

equality of holdings of primary goods or of resources can go hand in hand with serious inequalities in actual freedoms enjoyed by different persons. The central question is whether such inequalities of freedom are compatible with fulfilling the underlying idea of the political conception of justice.

In the capability-based assessment of justice, individual claims are not to be assessed in terms of the resources or primary goods the persons respectively hold, but by the freedom they actually enjoy to choose the lives that they have reason to value. It is this actual freedom that is represented by the person's 'capability' to achieve various alternative combinations of functionings. (81)

(4) 政治神学と経済神学

24. 武士か平民か

武士道と媒介された日本キリスト教の限界という議論

古屋、栗林による賀川豊彦論

政治神学ではなく、経済の神学が必要。

25. 凡人の倫理に基づく資本主義

自然的欲求の肯定から考える

cf. 達人倫理

アーレントは？

古代ポリスの公共空間（アゴラ）において喜びを感じる人間は

エリートか？

マルクスは？

労働者階級を指導する前衛党

26. 凡人（民）の私利私欲の充足（経済活動）から倫理的秩序が構築されるというのは、
楽観的？ 政治（官）の指導・コントロールの必要性？

↓

27. 二分法の限界

キリスト教思想：二つのモデルの並存と相互媒介

二つの創造物語